

芦原町本荘の春日神社本殿

吉 田 純 一*

Kasuga Shrine Main Hall of Honjo region in Awara Town

Junichi Yoshida

This paper is a report of the Kasuga Shrine Main Hall located in the Honjo region of Awara Town. Major factors that are clarified in this paper are as follows.

The Main-Hall is of the Nagare-zukuri style. It was built in the twelfth year of Genroku at Edo period (1699), by the carpenters named Sugihara who were living in Ii-village at near here. The building expenses were collected by the way of selling Tomihuda, now called Takarakuzi.

1. はじめに

芦原町本荘の春日神社は、同地区の中番・下番の入会地にあり、地元の人には“お春日さん”の愛称で親しまれている。この地は平安時代末に成立した奈良興福寺と春日大社の荘園、河口庄の中心となった地域で、“本荘”という地名もこれに起因していると伝わっている。そしてこの春日神社は河口庄に含まれていた十郷すなわち本荘郷のほか、新郷・王味(大味)・兵庫・大口・新庄・関・溝江・荒居・細呂宜(細呂木)の各郷にあった春日社十社の総鎮守社であり、春秋の祭礼にはこれら十郷各社の神輿がここに結集して盛大なにぎわいをみせていたという(注1)。

この春日神社がつくられたのは今から800年以上も前のことである。『春日神廟記』(注2)によれば、寛弘8年(1011)に越前国押領使斎藤民部少輔伊傳がこの地の豪族徳丸美佐崎を使として奈良の春日大社へ100石の神供を寄進して、春日大社とのつながりがはじまったという。そしてそれからほぼ90年後の天永元年(1110)になって勅使中納言藤原時実以下、興福寺の衆徒観如僧都や僧侶80余人、伊予法眼入道そして春日社の大連社官中務丞藤原国等ら社士480余人が奈良から大挙下向し、ここに春日神社を遷祀することになった。これを信ずれば春日神社の創建は今から883年も前のことになる。ほかに保元元年(1158)ころにできたとする説もあるが、それでも835年前である。いずれをとるにしてもこの春日神社は平安時代末期に創建されたもので、以来、今日まで800～900年余の長い歴史をもっていて、福井県内でも有数の古社であることはいうまでもない。

ところでこの夏、当社の氏子総代や役員の方々に依頼され、現本殿の建築調査を行った。その結果、本殿の建築形式や建築年代、さらに建設の経緯や背景などを明らかにできたので、ここに報告しておきたい。

*建設工学科建築学専攻

2. 本殿の建築形式

(1) 三間社流造の本殿

本殿は現在、覆屋（おおいや）の中にあるが、三間社流造（さんげんしゃながれづくり）の形式をもっている。三間社とは正面の柱間数が三つあることを意味し、流造とは側面からみると屋根が前後非対称で、前方の流れが後方よりも長く、軒も低くなっている形式をいう。この形式は江戸時代につくられた神社本殿にもっとも一般的にみられるものであるが、正面の柱間がひとつだけのいわゆる一間社の例が多く、それより大きい三間社や五間社の例は限られている。屋根は薄い板を重ねて葺いた柿葺（こけらぶき）で、棟には長さ3尺ほどの笏谷石の切石が並べられている。背面（北側）の屋根がやや朽ちていて、修理を要するが、覆屋に保護されているためか屋根全体の痛みは少ない。

(2) 古風な細部の形式

丸柱の上の組物（くみもの）は大斗（だいと）・肘木（ひじき）に3つの斗（と）が乗る平三ツ斗（ひらみつど、写真-4）で、正面中央間の中備（なかぞなえ）には簀股（かえるまた、写真-5）がついている。これらはいずれも当初は彩色が施されていたようで、現在も正面部分に

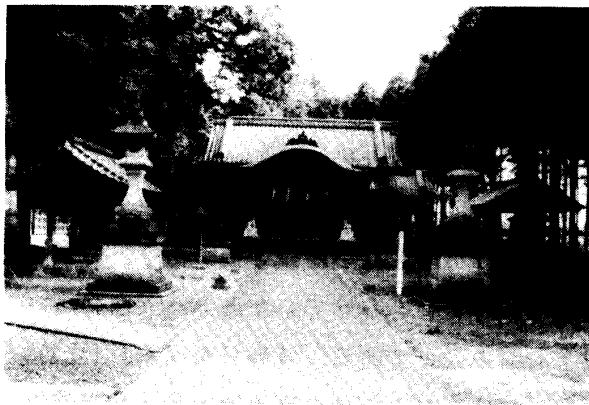
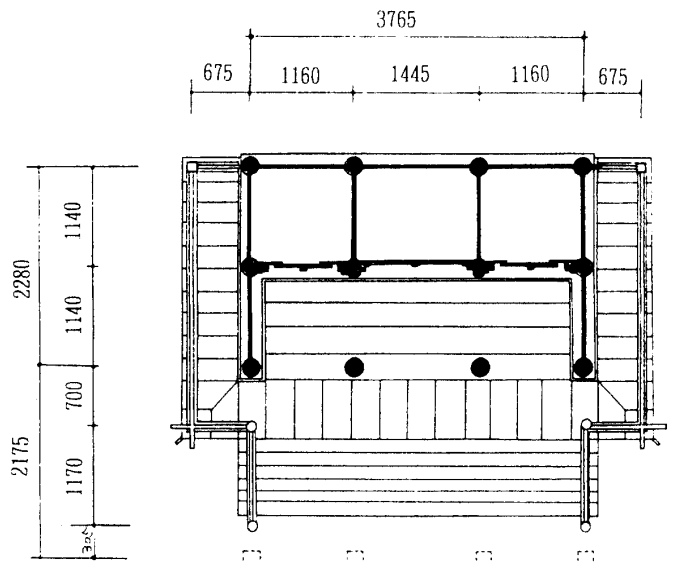


写真-1 春日神社の拝殿正面



図版-1 春日神社本殿の平面図



写真-2 西面（本殿は後方の覆屋の中にあ）



写真-3 本殿正面

わずかにその名残がみられる。また柱や長押などの表面はもとは漆塗りであったようである。ところで、組物やそれにつく挙鼻（こぶしばな、写真-6）、墓股などの建築細部の形式や手法はかなり古く、江戸初～中期にかけての様相をとどめている。

（3）身舎（もや）と向拝（こうはい）

本殿の平面は図-1に示す通りで、丸柱で囲まれた正面3間、側面2間の部分を身舎（もや）といい、その前方の6級（6段）の木階（きざはし）がある部分を向拝（こうはい）という。そして身舎の前面と両側面には高欄つきの縁がまわり、両側面の後部には脇障子（わきしょうじ）がついている。

身舎部分の前方1間は現在開放のままになっている。しかし前列の4本の丸柱はいずれも手前の半分だけ風触が著しくみられ、これらの柱の向き合う面には敷居や鴨居の仕口跡があるから以前はこの柱筋で建具がたち、間仕切られていたことがわかる。いっぽう後方の1間は内陣であり、柱筋で左右3室に区分され、中央間に木造の阿弥陀如来立像（伝鎌倉時代、芦原町指定文化財）が、両脇間には薬師如来像や地藏・観音菩薩像がそれぞれ厨子内に納められている。中央の厨子は嘉永6年（1853）につくられたもので（注3）、扉は素木（しらき）に繊細な彫刻が施され、内部はあざやかな朱漆塗である。両脇の厨子はその2年後の安政2年（1855）につくられ（注4）外部は総黒漆塗である。当社の祭神は天津兒屋根命、武甕豆知命、経津主命、姫太神の4神であるが、このように本殿に仏像を安置しているのは神仏混淆にともなうものである。

いっぽう、身舎の前方につく向拝部分は人の崇拝場所である。木階の手前にはこの部分を覆う屋根を支えるための向拝柱がたつのが普通であるが、現本殿にはこの柱がみられない。しかし、

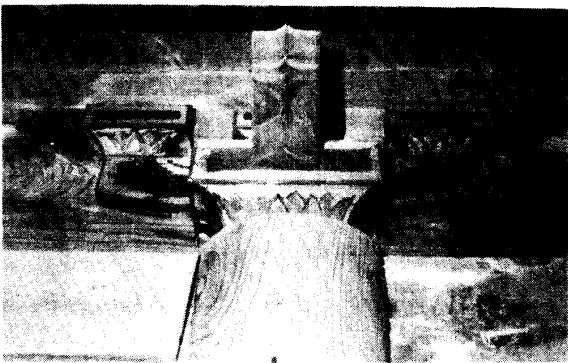


写真-4 組物（平三ツ斗、ひらみつど）

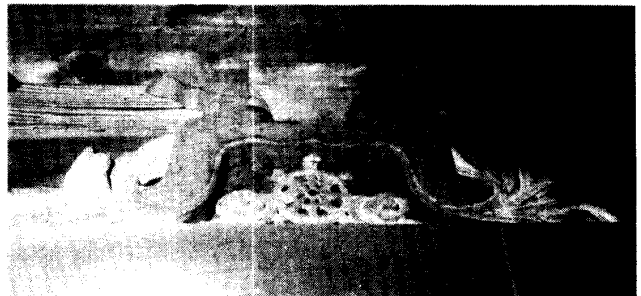


写真-5 墓股（かえるまた）



写真-6 挙鼻（こぶしばな）



写真-7 もとの向拝柱の上部に残る手挟（たばさみ）

これは拝殿と本殿をつなぐ幣殿を補設した際（明治期ころとみられる）、この位置に梁を渡して柱を取り除いたためである。したがって当初は当本殿にも木階の手前に4本の向拝柱がたっていた。もとの柱の上についていた手挟（たばさみ、写真-7）がふたつそのまま残っていることはこれを裏付けている。なお向拝柱は身舎の丸柱と違って、四角の角柱であった。

3. 建築年代と本殿のもつ意義

（1）元禄12年（1699）の建築

身舎前方隅の天井板を取り外して屋根裏を調べたところ、東西に架けられている梁に棟札（むなふだ）が2枚釘で打ちつけられていた。このうち写真-8に示した上棟札には、末尾に「元禄拾二稔己卯正月十一日 治(始)メ、同閏九月六日成就」とある。これは元禄12年（1699）正月11日に手斧始（ちょうなはじめ）が行われ、その年の秋閏9月6日に完成したことを示している。手斧始とは工事着工の儀式であり、ほぼ9カ月かかって完成したことがわかる。こうした棟札はその建物が完成した際に取り付けられるのが普通であり、そうすれば現在の春日神社本殿はこの上棟札が示すように元禄12年（1699）の正月から閏9月にかけてつくられたことになる。ただし時には別の建物の棟札が取り付けられていることもあるので、さらに細かい検討が必要になってくる。たとえば同時にみつかったもう1枚の棟札は同じ元禄12年の年号をもっているが、日付は9月26日であり、建物名も「安全堂」とあって、この本殿ではなく、別の建物の可能性もある（注5）。

しかしながら先に述べたように現本殿の組物や挙鼻、簷股などの細部は、江戸初～中期ころの形式をもっていて、こうした細部様式から推定できる建築時期もこの棟札の年代と矛盾しない。したがってこの上棟札を現本殿の造営に関するものとみなすことができ、現在の本殿の建築年代を元禄12年（1699）閏9月6日と断定できるのである。すなわち春日神社の本殿は今から284年前のものということになる。

ところで『芦原町史』によると、春日神社の社殿は正保2年（1645）閏5月に焼失し、その後たびたび勧進が行われている（注6）が、再建までにはいかなかった。そのために後述するように、富くじによって造営費を調達し、ようやく元禄12年（1699）になって再建されたものとみることができる。

（2）福井県内でも有数の古社殿

『福井県の建築』（注7）によると、春日神社と同じような流造の形式をもつ本殿で、17世紀以前のものはわずかに10余棟知られているだけである。しかも三間社に限定すれば、池田町の須波阿須疑神社本殿（延徳3年、1491）、三国町の滝谷寺鎮守堂（16世紀）および鯖江市鳥井町の春日神社本殿（慶長18年、1613）の3棟だけで、これらはいずれも国の重要文化財に指定されている。つまり本荘の春日神社本殿は福井県内ではこれら重文に続く古い三間社流造の現存例となるのである。しかも、向拝柱が取り除かれ、身舎前面の柱間が改変されているが、これ以外には大きな変更も認められず、細部には彩色の跡も残っていて、創建当初の様子をよく留めている点も評価できよう。

なお地元の芦原町内では、これまで最古といわれていた北潟の松ヶ崎天神宮本殿（宝永4年

1707) (注8) よりも8年ほど建設年代がさかのぼり、これに代わって町内最古の歴史的建築となる。

4. 造営の背景

(1) 富札による造営費の捻出

先に示した写真-8の上棟札には、表に「覚」として建設の経緯が記されている。これによると、そのころ春日神社の社殿がなかったので再創しようとしたが、財力が乏しかったので富札をつくり、これを売買して造営費を調達したとある。前述のように正保2年に社殿は焼失しており、盛んに勧進を行っていたが、思うに任せなかったようである。そこでこの富くじの興業がとられたのであろう。この詳細については今のところ不明であるが、きわめて興味深い事例である。

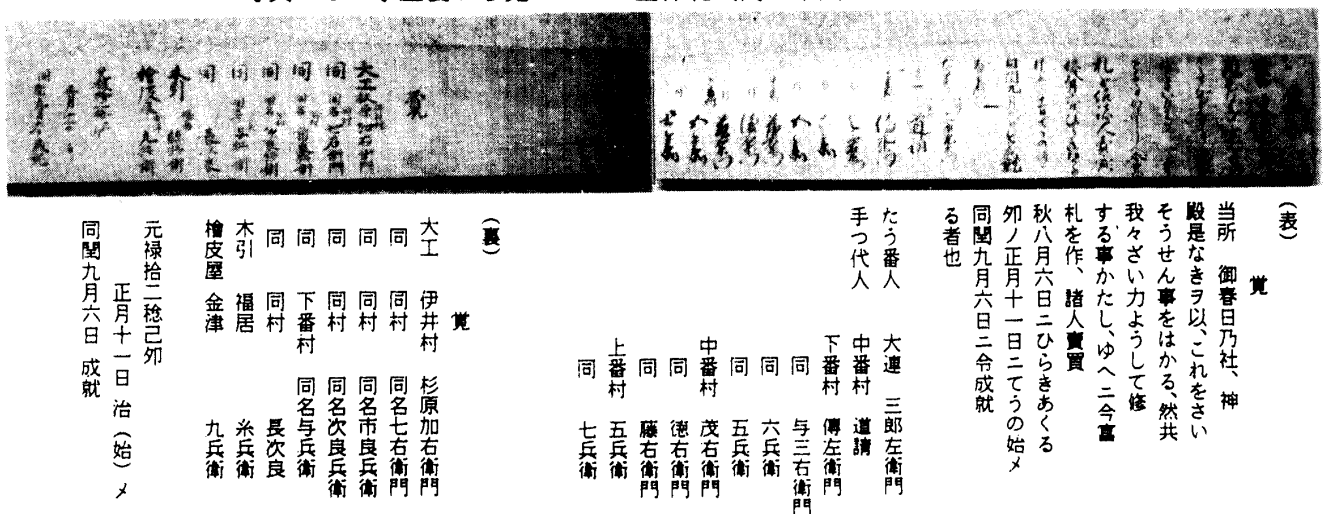
なお富札は富突きとも呼ばれ、江戸や大坂などでは江戸初期からすでに行われていたが、特に元禄期以降になって寺社の造営などで盛んになったという(注9)。建築史の分野ではこれまでに佐藤正彦教授(九州産業大学)が熊本の藤崎八幡宮や久留米の高良神社の富くじの実例を報告されている(注10、11)が、ともに18世紀中期以降の例であり、春日神社の場合はこれより50年ほども早く、かつ福井県内では初めて確認された例である。

これらの記述に続いて合計11名の名前が連記されている。筆頭の「たう里やう人(棟梁人)大連三郎左衛門」は当社の神官である大連家の祖先である(注12)。これに続く「手つ代人(手伝人)中番村道請」をはじめ下番村の傳左衛門ら4名、中番村の茂右衛門ら3名、上番村の五兵衛ら2名の者はそれぞれ地区の代表者とみられ、彼らが富札の発行や販売などにかかわった責任者あるいは世話役であったろう。

(2) 大工などの職人

この棟札の裏にはこの造営に携わった大工や小(木)引、檜皮屋(ひわだや)の名前が記されている。大工は6名で、筆頭の加右衛門から4番目の次良兵衛まではいずれも杉原姓を名乗る伊井村の大工である(注13)。伊井村は今の金津町伊井に比定できようが、恐らくそこにいた加右衛門を頭とする大工の一族であろう。5番目の与兵衛は地元下番村の大工であるが、やはり杉原

写真-8 小屋裏から見つかった上棟札(高 中央18cm 端部16cm 長83cm)



(表)

当所 御春日乃社、神
殿是なきヲ以、これをさい
そうせん事をはかる、然共
我々さい力ようして修
する事かたし、ゆへニ今富
札を作、諸人賣買
秋八月六日二ひらきあくる
卯ノ正月十一日二てうの始メ
同閏九月六日二令成就
る者也

たう番人 大連 三郎左衛門
手つ代人 中番村 道請
下番村 傳左衛門
同 与三右衛門
同 六兵衛
同 五兵衛
中番村 茂右衛門
同 徳右衛門
同 藤右衛門
上番村 五兵衛
同 七兵衛

(裏)

大工 伊井村 杉原加右衛門
同 同村 同名七右衛門
同 同村 同名市良兵衛
同 同村 同名次良兵衛
同 下番村 同名与兵衛
同 同村 長次良
木引 同村 糸兵衛
檜皮屋 同村 九兵衛
金津
元禄拾二稔己卯
正月十一日治(始)メ
同閏九月六日成就

姓を名乗っていて、伊井村の大工と強いつながりがうかがえる。あるいは地元の社殿の造営に当たって、彼が仲介者となって伊井村の彼らを連れて来たのかも知れない。なお6番目の下番村の長次良は苗字をもたず、この与兵衛の下にいた大工であろう。大工以外の職人としては小引の糸兵衛と檜皮屋の九兵衛がみられ、それぞれ福居（福井）と金津町の者である。つまりこの春日神社の造営にかかわった職人たちは、伊井村の杉原姓の大工一族や彼らと深いつながりをもつ地元下番村の大工、そして金津の檜皮屋など比較的近隣の職人たちであったことがわかる。

5. おわりに

以上のように、三間社流造の形式をもつ本荘の春日神社本殿は、今から280余年前の元禄12年（1699）閏9月につくられた建築で、細部の形式、手法もほぼ江戸初～中期にかけての様相を呈している。三間社流造の本殿としては福井県内で国の重要文化財に指定されている3棟につぐ4番目に古い現存例となり、きわめて貴重なものである。

このほか、富札の売買による造営費の調達や造営にかかわった大工などの職人も明らかになり、江戸時代における建築生産の実態をうかがい知る上でもきわめて興味深い事例といえよう。

（注）

1) 芦原町史編纂委員会『芦原町史』（p126）昭和48年刊

2) 『春日神廟記』（注1の『芦原町史』p123~125 所収）

3) 当社所蔵の棟札（尖頭形 高47cm 幅 上部 11.5cm 下部 10cm）

表に「奉新造春日宮御厨子氏子施主穰災招福処」、

裏に「于時嘉永六癸丑年二月二十四日也 大連彦兵衛代国政富番、施主北嶋治郎八、細工人三国湊 井田竜造」などとある。

4) 当社所蔵の棟札（尖頭形 高40.5cm 幅 上部10cm 下部 9cm）

表に「奉新造両脇御厨子施主現当諸願成井氏子安全処 施主北嶋治郎八、富番大連彦兵衛」裏に「安政二乙卯天十二月二十日」とある。

5) 同時に見つかったもう1枚の棟札（尖頭形 高73cm 幅 上部12.5cm 下部 9.5cm）

（表）

元禄拾二年

正寶院

奉治春日大明神本地供神前安全堂成就之所

卯ノ九月廿二日

敬白

（裏）

□□氏子 安全守所

6) 注1の『芦原町史』p435 なお勧進が正保4年(1647)、万治元年(1658)、寛文4年(1664)などに
行われていることは北島英彦氏よりご教示を得た。

- 7) 『福井県の建築』平成元年7月刊、(『福井県史 資料編14』の別刷)
- 8) 注7と同じ
- 9) 湯浅 隆「近世寺社の造営費用調達について」(『古図にみる日本の建築』国立歴史民俗博物館編 至文堂 平成元年4月、所収)
- 10) 佐藤正彦「高良神社における造営費用の調達」日本建築学会大会学術講演梗概集 1981年
- 11) 同「藤崎八幡宮の造営費の調達」 同 1989年
- 12) 芦原町下番地区にある東大連家と西大連家がこの流れを引く家であるが、両家ともに現在は宮司を務めていない。
- 13) 坂本豊氏(郷土史家)からは、杉原は姓名ではなく、組名であろうとのご指摘を受けたが、ここでは姓とみなしておいた。なお、下番の藤野真一氏より、同藤野家や春日神社の前にある興源寺も伊井の大工がつくったというご教示を得た。

(平成5年12月8日受理)